会津戦争のこと

今からちょうど 125 年まえ（1868）に、この会津に、大きな戦争がありました。

これは、日本の国の中でおきた戦争ですが、江戸（今の東京）と東北地方を除いた、日本のおおかたの軍勢が、このせまい会津に一度に四方からおしよせてきたという、会津にはそれまでなかった、えらい戦争でした。

と、いっても、会津が決して悪いことをしたわけではありません。
それどころか、会津のひとびとは、天皇がおられる京都のまちに、悪いものがはびこっているので、天皇とその都を六年間も守っていたのです。
しかし、意見のくいちがいからとうとう戦争となり、おおよそ西の軍勢は、江戸を攻めてきて、その次に、会津へと攻めかかってきたのです。

白虎隊が飯盛山でせっぷくしたのもこのときですが、そのあと、鶴ヶ城を守って、ひと月ばかり激しい戦争がつづきました。
そのあと、会津は力がつきて、降伏しましたが、会津のまちは、おおかたが焼跡になり、
大切なものは奪われ、住むにも住めない、そして貧しいところになりました。

リン先生とえびな季昌

その戦争の 3 年まえ、リン先生は、海老名という家にお嫁入りされて、海老名リンとなられました。
リン先生は 17 歳、ご主人の季昌（すえまさ）さんは、20 歳でした。
リン先生がお生まれになったのは、お城のすぐ東側の小田垣に会った日向という家で、お父さんは、新介、お母さんはまつといわれました。
お父さんは、お侍の*中堅どころの家で、その二女でした。

リン先生は、子どものころから、たいへん賢い子で、*和歌などをお習いになり、13 歳のときから塾に通い、裁縫やお作法を習って、立派な、そして美しいお嫁さんに、なられたのです。
海老名家は、季昌さんのお父さまが、軍事奉行という、たいへん重い役をされている家でした。
季昌さんも、結婚の翌年、*京都勤番を命ぜられ、大砲隊の組頭として、京都に行かれました。
その翌年ですが、*万国博覧会がフランスのパリで開かれ、日本にも招待がありましたので、徳川秋武という方が日本の代表として、いかれることになり、そのお付き添いとして、季昌さんが、選ばれたのです。
そのころ、ヨーロッパなどというのは、船で何十日もかかる遠いところだったのです。そしてほとんど日本人は行ったことのないところでした。

*）中堅どころ　中心となって働く、まん中ぐらいの地位のこと。
*）和歌　日本で昔から歌われてきた詩歌。おもに短歌などをいう。
*）京都勤番　天皇のいる京都を守るため、交たいで仕事をする人、または役目の名まえ。
*）万国博覧会　いろいろな国の文化や芸術、産業をしょうかいする国際的な博覧会。

お留守ばんと戦争

ご主人がヨーロッパに行かれ、その留守居をすることになったリン先生は、おじいさま、お父さま、お母さまと、ご主人の弟と妹たちを大切にして、よく家を守っておられました。
ご主人はフランスから、ヨーロッパのほうぼうを回り、いろいろな国の様子を、丁寧に見て、勉強をされ、約１年ほどかかって、勤めを立派に果たし、日本に帰国されました。

ちょうどそのころ、京都では、戊辰戦争（会津戦争の始まり）が始まるというところでしたので、季昌さんは、まっすぐ京都へかけつけ、大砲隊を指揮し、大きな手柄をあげられました。
しかし、敵弾のため、右足を負傷され、戦線から退き、会津へ帰ってこられました。
ようやくリン先生は、ご主人に再会されたのです。

しかし、西軍は、江戸と会津の東軍に勝ち、その勢いで、東の国々を攻め、江戸を降伏させてから、会津を攻めようと近づいてきました。
会津は、これを迎え討とうとし、傷がだいぶよくなった季昌さんを、家老という一番重い役に引き上げました。お父さまは、白河まできた敵と戦い、自刃されました。

敵がいよいよ会津へ攻めてきたのは、8 月 23 日の朝でした。
お城の鐘の合図で武士の家族は、お城の中へはいるように、というふれがまわっていましたが、
リン先生は、家族の世話や、いろいろな用意もあっておそくなり、みんなを連れて、お城へ着いたころには、門がしまってしまって、入れなくなったのです。
先生は、しかたなく、家族を連れて、西の方へのがれ、大川を渡って、高田へ行かれました。
敵が高田へもくるというので、紋付の着物で、身を固め、女ながらも、敵を討とうとされましたが、敵は、高田へは来ませんでした。
しかたなく自刃をしようと、されましたが、まだ城は落ちていないからと、止められ、悔し涙にむせばれました。

*）自刃　刀などを使って、自分の命を終わりにすること。切腹。
*）紋付の着物　背中や胸のところに家の紋がついていて、特別なときにだけ着る、とてもあらたまった着物。

落城後の苦しみ

会津の城が落ちたのは、それから 1 か月すぎてのことです。
夫の季昌さんは、家老としての責任を負われ、東京へ護送されて、細川家の預かりとなります。
リン先生も、家族をはげまして、苦しい生活を続けておられました。

翌年、明治 2 年の末になって、新政府は、まだ小さな殿様のお子さまに、跡を継ぐことを許され、斗南県の知事を命ぜられました
。それで、その翌年には、会津の侍と、その家族は、そちらへ移り住むことになったのです。

ところが、その斗南というところは、今の青森県の、北のはじっこで、遠い、遠い、ところだったのです。
リン先生も、家族と、実家の家族をお連れになり、この遠い国に旅立たれました。
もちろん、電車などはありませんから、大きな荷物を背負って、歩くしかないのです。

雨の日も、風の日も、ただ歩くだけです。それは苦しい旅でした。
ところが、ようやく三戸というところへ着いてみると、斗南というところは、土地がやせておって、ろくにお米もとれず、野菜も育たぬ、また寒さの強い困った国でした。

そして、それからは、たいへん苦しい、食うや食わずの生活が、3 年ほどもつづくのです。

苦しみのあとの安定

明治 5 年になって、季昌さんが仮にゆるされて、帰ってきました。一家が、大よろこびだったことは、もちろんです。

季昌さんは、青森県庁ができたので、そこへ勤めに出ましたが、今まで*賊軍といわれていたので、折り合いが悪く、そこをやめて、一家して、東京へ行くことにいたしました。
しかし、東京へ出ても、よい職はなく、苦しい生活は、同じでした。
季昌さんが、ようやく安定した生活には入れたのは、明治 8 年になってからで、警視庁に勤めることになってからです。
警視庁は、人物を見込んで、警部補という役につけたのです。ようやく生活が安定し、リン先生もようやく安心されました。

また明治 9 年、今の山形県ができたので、その中の郡長として、あちこちに転任され、
そのあとは福島県に移って、ここでも郡長として*信夫・北会津・石川とまわられ、
地方のために、力を尽くされました。
明治 15 年春になって、リン先生に、初めて女の子が生まれ、元子と名づけられ、
すくすくと、育たれました。
これがあとで、若松幼稚園の第二代園長になられる人なのです。
また明治 19 年には、季昌さんは、警視庁の警部に出世され、リン先生も東京で、
ゆたかな生活ができるようになったのです。

*）賊軍　国や、政府にさからっている軍のこと。
*）信夫　福島市周辺の呼び名。

リン先生の大決心

明治 21 年になって、リン先生は心に深く思うことがあって、*洗礼をうけられ、キリスト教の信者になられたのです。
このころ、日本でもキリスト教が盛んになってきましたが、特に婦人の方に多く、世の中を清く美しくする運動が行なわれました。
リン先生は、その運動の中にあって、これは、子どものころからの教育が、もっとも大切だと、強く思われるように、なりました。
幼稚園を盛んにすることが、世の中をよくすることだと思われたのです。

ちょうどそのころ、赤坂で幼稚園をひらいておられた方が、関西に行かれることになり、リン先生のお人柄を見こんで、その後をやってくれないか、という相談がありました。
幼稚園に、大きな関心を持たれていたリン先生は、よろこんで、その幼稚園を引き受けられることになりました。
これがリン先生の幼稚園長のはじまりでした。

また芝の麻布にも、幼稚園をひらき、ますます勉強されて、保母の免許も、受けられました。

*）洗礼　キリスト教の信者となるための儀式。

会津にも幼稚園を

明治 25 年、夫の季昌さんが役をおわられ、会津へ帰ることになりました。
リン先生も、ここでまた、一つの決心をされました。
それは、今までも念願であったのですが、会津が戦争のため、まだ荒れている会津の地を、立派にするためには、人を造ることが大切で、それには、子どもからの教育が必要だ。今こそ会津へ幼稚園を作ろう、と強く思われたのです。

まだ会津は、汽車も電車もなく、電燈もない、さびしい田舎の町のようになり、夜はランプをともし、あんどんの家さえありました。
先生は、早く会津を盛んな、立派な町にもどしたいという心が、胸いっぱいだったのです。

会津へ帰られたリン先生は、さっそく、幼稚園をひらく準備をされ、その翌年の明治 26 年の 4 月から、いよいよ幼稚園をひらかれるのです。
場所は甲賀町口（今は栄町で市役所の分庁舎のあるところ、もとの石垣が残っている北）で、名は若松幼稚園とされました。

花ひらく若松幼稚園

はじめは、幼稚園というものが、そんなに大切なものかと、町の人は、あまりわかりませんでした。
はじめの園児は、8 人ばかりでしたが、だんだんに、その大切なことがわかって、入園の子が増え、たちまち 40 名をこえるというように、盛んになりました。

次の年には、川原町に分園をひらかれましたが、これは、今の中町に移り、また日新町に移って、今の第二幼稚園となりました。
さらに明治 38 年には、材木町に分園ができ、これは川原町に移り、今の湯川町に移った第三幼稚園です。

園児は、年々ふえ、ますます盛んになりました。

会津に女学校も

明治 23 年に、若松に、私立会津中学校が、ひらかれましたが、これは男の子ばかりの学校で、女子の入れる学校は、小学校しかありませんでした。

リン先生は、幼稚園ばかりでなく、女子の教育が大切なことを、まえまえから強く考えておられたのです。
第一幼稚園をひらくと、同じ年の 7 月には、同じところに、若松女学校をひらき、翌年会津女学校となりました。
この女学校は、十余年後市に寄付されましたが、市は、この学校を「*女子技芸学校」としました。
リン先生は、「*高等女学校」にしてもらいたいと、思っておられたのですが、これは、リン先生をがっかりさせました。
しかし、それは明治 42 年になって、4 年制の県立会津女学校となったのです。

明治 30 年ころ若松はまだ町で、市になってはいませんでした。
これは、人口があっても、産業や教育や文化の程度が、低かったからです。
季昌さんは、町民から推されて、町長になられ、努力の結果、32 年 4 月に、県で初めての市が生まれ、若松市となりました。
そして、7 月まで市長事務取扱として、市政に努力されるのです。
この年から、もくもく煙をはく汽車が、若松までひかれ、市民は便利になりました。

*）女子技芸学校　仕事をするために役立つ、技術を中心に教える女学校。
*）高等女学校　学問を中心に教える女学校。

晩年のご活動

リン先生は、あまり働かれたので、お疲れになったのでしょう。
明治 30 年代に入って、先生も 50 歳になられ、急に弱られ、病床に臥せられるようになりました。
しかし、療養に専念されましたので、一時は、危なかった病気も、だいぶよくなられたのです。

少しよくなられると先生は、じっとしておられません。
幼稚園を大きくすること、愛国婦人会のお仕事、いろいろなおおやけのお仕事に、力を尽くされるのです。
またキリスト教の運動を、ひろげられました。

明治 37 年には、*日露戦争が始まるのですが、これにもお仕事が増えました。
しかし、だんだんからだが弱られそれでもがんばられました。
明治 41 年には、とうとう病気が悪くなったので、娘さんの元子さんに、幼稚園の仕事をゆずられました。

その翌年、明治 42 年 4 月 20 日の朝、とうとうお亡くなりになったのです。お歳は 61 歳でした。市内の宝町の浄光寺に葬られました。
昭和 7 年になって、幼稚園の卒園生が集まって、リン先生の石像を浄光寺の境内に建てました。
今年は若松幼稚園創立百年、リン先生は、しずかに眠っておられますが、どんなお考えでしょう。

*）日露戦争　日本と今のロシア共和国とのあいだで戦った戦争。

りん先生 -小学生のみなさんに-

このあと、リン先生の娘さんのモトさんが幼稚園を継がれ、
さらに数人の園長先生が、幼稚園を守られました。

戦後、モト先生に見込まれた玉川喜代子先生が、園長先生となり、
通算 58 年の長い間若松幼稚園を支えられました。

そしてその後、
玉川勇先生、芳男先生、加藤光子先生が引き継いで現在に至っています。